

第1章 戦場

軍隊の生活②

苦しかった軍隊での生活

おうくらまさし
黄倉正志さんのお話から

○配給制 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。札幌市では昭和十五年（一九四〇年）四月に児童のゴム靴に切符制が導入され、六月に米、砂糖などに広まった。

○供出 国などの要請によって物資を差し出すこと。

○手旗信号 旗信号の一つ。陸上または船上で、右手に赤、左手に白の小旗を持ち、これを振り動かしてつくる体形の組合せで、遠くにいる相手に通信する。

私は農家の生まれで、十人兄弟の長男でした。小学校を卒業すると、父が脳溢血で倒れて半身不随になりました。とにかく上の者が働かないことには、下が食べていかれない時代でしたから、小学校を卒業してから兵隊へ行くまでの九年間、母親と私たち兄弟で農作業をして養いました。当時は機械ではなく全部手作業なので大変な重労働でした。

昭和十七年（一九四二年）ころになると、配給制が始まって、物資の不足が目に見えるようになりました。着る物はもうボロボロで、膝に穴が開いたまま。靴に穴が開いても修繕する糊すらありません。そして食べ物は作っても、作っても供出しなければならず、農家なのに食べ物も満足にありません。

私は昭和二十年に海軍に入隊しました。「もう帰ってくることはない。国のために兵隊に行って死ぬのだ。」と、弟たちに家を託して札幌駅を出発しました。何両も繋がった臨時列車に乗せられ青森県の大湊へ向かいました。千人の兵隊が全国各地から連れてこられました。

軍隊での生活はひどいものでした。軍隊に入った途端に、いろいろな事をいっぺんにたたき込まれます。入隊初日の朝から、練兵所へ集合すると手旗信号の試験があります。分かった人は朝食を摂ることができますが、分からない人は外を走らされるのです。そうして走っているうちに朝食の時間はとくに終わっています。そう簡単に覚えられるものではなく、三日連続で朝食を摂れませんでした。これが始まりで、さらに四日目になると、「お前たちはもうお客さんではない、軍人精神を注入してやる。」と、班員二十人全員が壁に手を付けて並ばされ、

○兵舎 兵隊が寝たり食べたりするなど、日常生活をする建物。

○艦載機 戦艦、巡洋艦などに装備され、そこから発着する航空機。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

後ろから思いつきたたかれました。棒には「軍人精神注入棒」と書いてあります。太さは三種類あって、細い方が特に痛いのです。訓練というよりイジメです。

終戦間際は頻繁に空襲がありました。私たちがいた兵舎にも艦載機がやってきて、その度にみんな防空壕へ逃げ込みました。ある日、防空壕にみんなが避難していると、用を足したくな

ったと言つて兵隊が一人、途中で兵舎に戻りました。その時、兵舎には食事が並べられていたのですが、その兵隊が三人分食べてしまったらしいのです。夜になってそのことが上官にばれてしまいました。私たちはもう寝る用意をしていたのですが、全員、板の間に正座です。そして、その盗み食いをした兵隊が連れてこられて、教官十人に交代で、延々とおしりを殴られました。立つてなんかいらなくなり、気が失つても水をかけられてまた殴られるのです。私たちもずっとたたかれるのを見ていなければなりません。そして次の日、上官が「彼は戦死した」と言うのです。何が戦死なものですか。本当は彼は殴り殺されたのです。私たち兵隊は何のため



イメージ図

供出

○高射砲 敵の航空機の攻撃から護るために作られた大砲。帝国陸軍では高射砲、帝国海軍では高角砲と呼んだ。

○機銃掃射 機関銃などを敵をなぎ倒すように射撃すること。

○玉音放送 天皇自身の肉声による放送。特に終戦を伝えるラジオ放送を指すことが多い。

に集められたのか、軍隊というのとは一体何なのか、そう思うと、怒りで我が身が震えました。軍隊の兵器もお粗末なものでした。空襲が来て高射砲で迎撃しても弾が届かないのです。機銃掃射も、敵国のものは人間の体半分くらいの間隔で弾が飛んできますが、日本のものはパン、パン、パンと間隔が遅いのです。こんなもので戦地に立たされていたのです。

終戦近くなると、本土決戦に備えて銃後を守る人たちも訓練に駆り出されました。その訓練で使う兵器はさらに粗末なもので、新兵が千人いてもまともな武器を持っている軍人が三百人。竹やりが四百人、残りはオモチャのような日本刀を腰に差していました。

そのような状況に、八月十五日、荷物をまとめて練兵所に集まるよう号令がかかりました。ラジオを聴かされましたが、ガーガーという音ばかりで、その時すぐには戦争が終わったとは分かりませんでした。あれが、玉音放送だったわけです。その日のうちに、私ともう一人、たった二人の新兵で別の部隊に配属されることになりました。青森県の恐山でした。その裏側の沢の中に部隊が引



イメージ図

玉音放送

き揚げてきていました。その三百人くらいの部隊に私たちが配属されることになったのです。終戦になってもすぐに帰還命令は出なかったのです。でも軍隊に残っていれば、当然、食べ物やほかにもいろいろな物資が余計に必要なになる。私は入隊前、農業をしていましたが、作物は全部、供出させられ食べ物に困ってしまいました。国民はみんな食べ物に困っています。そして終戦になったのだから、すぐ帰ればいいのに、こんなところでゆっくりして、どうなっているのかと思いました。

九月十日、ようやく帰還命令が出ました。ところが、戦争に行く前は「お国のために。」とみんな、喜んで送り出してくれたのに、帰って来た時は、お前だけが帰って来たのでないかと憎まれるのです。やはり戦争は嫌いです。

復員して帰ってきた昭和二十年は大凶作でした。米は五分作くらい。ところがその五分作の米がほとんど取られてしまうのです。割り当てなのです。出すものを出したら自分の食糧は残ってません。農家をやっているのに、自分が食べるものが無いのです。他の町へ行って買うなんていう情けない時代もありました。

戦争中は供出、供出でみんなが苦しみました。でも帰ってきても決して楽なものではなかったのです。着物を売ったり、借金をしたりしてお金を工面しながらの苦しい生活が続いたので。戦争が終わってもつらい生活が続きました。

DATA

平成21年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月29日
- ・清田区役所



黄倉正志(おうくら・まさし)さん

- ・大正15年(1926年)生まれ
- ・札幌市清田区在住